

京都・興戸宮ノ前遺跡

1 所在地 京都府京田辺市興戸宮ノ前

2 調査期間 第三次調査 一九九八年(平10) 八月―一〇月

3 発掘機関 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

4 調査担当者 藤井 整

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 中世(一四世紀―一五世紀)

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

興戸宮ノ前遺跡は京田辺市の南西部に位置する。調査地は北側に興戸古墳群が、南側には田辺天神山遺跡が位置する丘陵に挟まれた



(奈良)

谷地形に立地する。調査前は水田に利用されていた。過去の調査によって、一

五世紀初頭の遺物片などとともに、五輪塔の一部が出土しており、寺院関連の遺構の検出が期待されていた。今回の調査では、長さ約五mの木樋とそれに伴う曲

物や区画溝が検出されたが、遺構面は削平を受けており、建物などは検出できなかった。墨書のある木板(1)はこの区画溝から漆碗や東播系の須恵器などとともに出土した。

また、この区画溝に先行する井戸SE六九の最下層から、墨書のある曲物の底板(2)が出土した。この井戸は石組み桶枠のもので、井戸枠の内径は六四cm、検出面からの深さは枠の底面で約二mであった。井戸内からは、瀬戸・美濃、中国産天目茶碗や瓦質茶釜などとともに墨書土師皿が出土している。土師皿には内面口縁部に沿って「□南備□」と墨書されており、中世の神南備信仰を考える上で重要な資料である。

8 木簡の釈文・内容

区画溝

(1) (花押) (花押)

□ (申上カ) (申カ)

□ (上カ) □ シ □ 上テ

□ テイ (花押)

トナニコ□カ□ワタリ



(2) 

径120×厚9 061

(1)の墨書のある木板は、中央部分で折れた形で出土した。板材の四周は面取り加工がなされており、特に表面からみて左側にあたる部分では、表面から刀を入れて切断した痕跡を確認することができ。ただし、文章の判読が困難なため、この切断と文字の前後関係は不明である。上部は二次的切断である。

表面には漢字と片仮名交じりで三、四行書かれているが、内容がわかるほどには判読できていない。また花押が四カ所に書かれている。裏面には文字列を三行（うち左端の一行は花押の可能性もある）確認できるが、状態が悪く判読は不能である。

(2)は墨書のある直径一二cmの曲物の底板で、材は針葉樹である。厚みは五〜九mmと不均一で、板は強く反っている。側面に細工や孔の類はない。墨書は二ないし三文字あるものと考えられるが、中央の一文字が「川」と判読できるのみである。

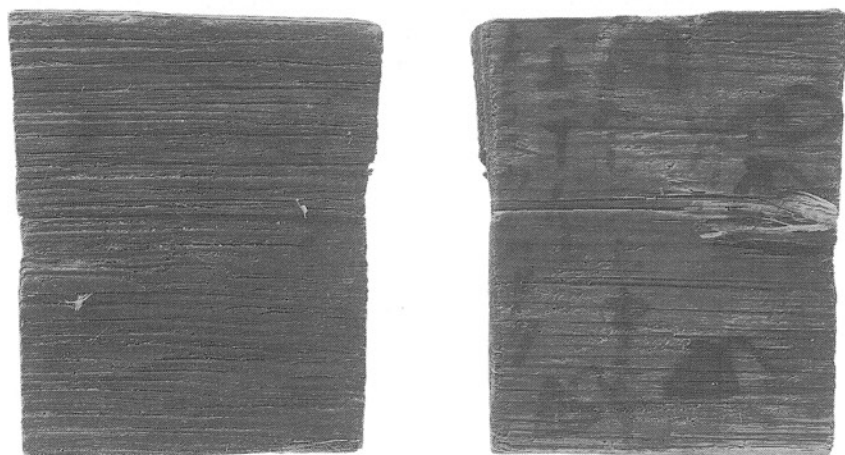
なお、釈読は向日市教育委員会の清水みき氏にお願いしたものである。

9 関係文献

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』八七

(一九九九年)

(藤井 整)



(1)